令和７年度「人権教育研究推進事業」研究指定校事業

都道府県・指定都市名（　山形県　）

１．基本情報

研究指定校名	東根市立大富中学校

○これまでの研究指定等の状況

－

○学級数

６学級（うち特別支援学級：２学級）

○児童生徒数

１１９人（令和８年２月１日現在）

○URL

https://ootomi-jh-higashine.edumap.jp/

２．調査研究のテーマ、概要、指定理由

調査研究のテーマ	「ウェルビーイング」の視点に基づき，人権意識を高める児童生徒の育成　～自己・他者・地域の「幸せ」を主体的に創造する活動を通して～　（※小中共通テーマ）

○調査研究のテーマを設定した目的

山形県では令和７年度から第７次山形県教育振興計画を展開しており、これまで本県で継続してきた「いのちの教育」の考え方や好事例を踏まえつつ、「ウェルビーイング」を目指し、様々な施策に取り組んでおり、人権教育や道徳教育についても重要な取組みとして取り上げられている。

また、子どもの人権に関わって、本県のいじめ問題に対する取組みは、学校における組織的・積極的な認知が広まり、早期発見・早期対応が進んでいる。しかしながら、インターネットやＳＮＳを介したトラブルは増加傾向である等、いじめを生まない風土づくりの重要性が高まっている。このような課題に対して、道徳科の授業や特別活動の時間を中心に、思いやりの心や規範意識等の醸成を進めているが、その内容をより系統的・継続的に指導していくとともに、個に応じた指導や支援をしていくことが

必要である。
　さらに、平成 28 年３月に策定した「山形県人権教育推進方針」に基づき、小学校と中学校における一貫した継続的な取組みを強化しながら、学校の教育活動全体を通じて、人権教育の理念である「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」につながる教育の実現を目指していくことも求められている。そのためには、小中学校段階に当たる９年間という大きな枠組みの中で、子どもたちの発達段階に合わせ、系統的かつ継続的に人権意識を高めていく必要がある。東根市大富地区は伝統的に小学校１校、中学校１校で構成される学区であり、「大富っ子構想」（小中連携・地域連携）のもと、人権意識を醸成する小中一貫の多様な活動に取り組んでいる。この土台のうえに、令和７年度からは「ウェルビーイング」をキーワードに、個人の幸せだけでなく、仲間や地域に住む人たちが幸せを感じられるよう、「子供」「高齢者」「外国人」「インターネットによる人権侵害」等の人権課題について、全教育活動を通した取組み、働きかけを行うことが有効であると考え、主体的・協働的に行動できる生徒の育成を目指し、本テーマを設定した。

〇調査研究の概要

　小中共通テーマに基づいた諸活動で培われた「他者への想像力」を「人権意識」へと昇華させるため，以下の３つの観点から多層的な支援・育成を展開した。
①「ウェルビーイング：個人の幸せ（自己肯定感）」の向上に向けた支援・育成
　・自己有用感の醸成
　　自分の行動が他者や社会に役立っている実感を深め，「自分は大切な存在である」という意識を育む。
②「ウェルビーイング：仲間の幸せ（他者への共感）」の向上に向けた支援・育成
　・多様な個性の受容
　　互いの違いを認め合い，誰もが心地よく過ごせる日常（学級・学校）づくりを行う（いじめ未然防止，ＳＯＧＩ等の理解推進）。
③「ウェルビーイング：地域の幸せ（社会参画意識）」の向上に向けた支援・育成
　・地域への主体的な働きかけ：
　　「花いっぱい活動」や「さくらんぼひがしねマラソンボランティア活動」等を，単なる定例の活動ではなく「地域のウェルビーイングを創造する活動」と捉え直し，主体的に行動する力を養う。

　これら３つの取り組みの効果を客観的に捉えるアンケート調査を実施した。数値化された生徒の変容と活動内容を照らし合わせ，その相関関係を検証することで，人権意識を高めるための有効な手立てを明らかにした。

〇指定理由

　本県では、「山形県人権教育推進方針」に基づき、子どもの自主性や主体性を重視しながら望ましい人間関係づくりを進めるとともに、すべての子どもが安全で安心に生活できる環境づくりを進めており、人権教育の充実に関する小学校、中学校それぞれの実践も行われている。一方、各地区で小中一貫教育が進められているものの、人権教育を通した、小中学校が連携した取組みの実践が少ないことが課題となっている。県の取組みとして現在策定中の「第７次山形県教育振興計画」の基礎にもなる「ウェルビーイング」と東根市大富地区で目指す「ウェルビーイングの視点を基に『人権

意識』を高める児童・生徒の育成」が研究実践に適していると考えた。
　また、東根市大富地区は、以前から小学校１校、中学校１校で構成される学区であり、現在も「大富っ子構想」（小中連携・地域連携）のもと「あいさつ活動」や「花いっぱい活動」などに継続して取り組んでいる。令和２年の豪雨水害をうけ、大富地区の避難所が大富中学校に指定され、小中合同で避難訓練を実施する等、「防災教育」にも力を入れてきた。その中で、地域には高齢の方や園児など、避難する際に配慮が必要な人がいること、避難する際にその人にとって障害となるものがないか等、「多様な視点」で物事を考える力が確実に身についてきている。その体制を活かして、子どもの発達段階に合わせて小中連携を強化した人権教育の取組みを計画している。その取り組みの中で、小学校６年間で育成された人権意識をさらに充実させることを目指した中学校としての実践が図られるとともに、地域に根差した小中一貫教育の好事例として全県に発信することで、本県が目指す「ウェルビーイング」の推進や、学校におけるいじめの問題、不登校といった生徒指導上の諸課題を解消していく手立ての１つになるものと期待されるため。

３．取り組んだ人権課題

※　該当するものに〇印。複数選択可。うち、最も主要な人権課題１つに◎印。
※　下線部は、令和７年度事業における重点課題。

① 子供	◎
② 女性	
③ 高齢者	〇
④ 障害者	〇
⑤ 同和問題	
⑥ アイヌの人々	
⑦ 外国人	〇
⑧−１ HIV 感染者等	
⑧−２ ハンセン病患者等	
⑨ 刑を終えて出所した人	
⑩ 犯罪被害者等	
⑪ インターネットによる人権侵害	〇
⑫ 北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬ 性的指向、性自認	〇
⑭ その他（　　）	

４．調査研究の内容等

〇調査研究の内容（「３つのウェルビーイング」の具体的展開）

「２．調査研究のテーマ、概要、指定理由」の「〇調査研究の概要」で掲げた３つの観点を具現化するため，以下の教育活動を構造的に実施した。

①「個人の幸せ（自己受容)」に向けた支援・育成

・自己理解の深化

性教育（生き方教室）やＳＣによる心理教育を通じ，自分自身の心と体，尊厳を大切にする態度を養った。

・教員の専門性向上

Ｑ－Ｕアンケート（学力とのクロス集計を含む）分析研修を通じ，個々の「居場所感」や「承認感」を可視化し，適切な個別支援に繋げた。

②「仲間の幸せ（他者共生)」に向けた支援・育成

・多様性への共感

「人権教室」や「スマイルサミット」を通じ，障がい，国籍，性的指向等の多様な背景を持つ他者の立場を想像し，いじめや差別を許さない集団を育成した。

・情報モラル

ＳＮＳ講演会を通じ，ネット上での人権侵害を防ぎ，互いを尊重したコミュニケーション能力を育んだ。

③「地域の幸せ（社会参画)」に向けた支援・育成

・貢献実感の醸成

花いっぱい運動やさくらんぼマラソン協力，さくらんぼ環境ＩＳＯ実践交流会を通じ，「自分の行動が地域の安心や喜びに繋がっている」という自己有用感を高めた。

〇実施方法（課題別の具体的アプローチ）

①　課題：子供・いじめ・差別

・客観的分析と支援

Ｑ－Ｕアンケート（学力とのクロス集計を含む）の結果と学力データをクロス分析し、教師の主観に頼らない客観的な生徒理解に努めた。個々の生徒が抱える具体的な「困り感」を早期に把握・支援することで生徒の自己有用感の育成を期待。自他者尊重する姿勢を養い、誰もが安心できる居心地の良い学級づくりを推進した。

・主体的解決

スマイルサミットに向けた学級討議にて具体的な差別事例を提示し，自分たちの手で「誰もが幸せな学校」をつくる意識を醸成期待した。

②　課題：外国人・障がい者・性的指向，性自認

・ロールモデルによる意識変容

ハリウリサ氏を講師に招聘。「笑い」による親しみやすさと、実体験に基づく「真摯な語り」を自分事への入り口とし、多様な背景を持つ人々が自分らしく生きる尊さを提示。これを通じ、生徒が差別的な視点を自らの課題として捉え直し、主

体的な意識変容を遂げることを期待した。

③　課題：インターネットによる人権侵害

・自己選択・自己決定能力の育成

インターネット利用における「単なる禁止」から脱却し、正しい知識に基づいた自己選択・自己決定能力の育成を図った。自分も相手も傷つけない「デジタルシティズンシップ」としての資質を養い、情報社会において自律的に行動できる力の獲得を期待した。

○検証・評価・改善・普及

【検証・評価】

①学校における調査　年２回　※主に「外国人・障がい者・性的指向，性自認」関すること

調査手段　Microsoft Forms（マイクロソフト フォームズ）による

調査項目　以下に示す項目

①．とてもよくあてはまる　②．どちらかというとあてはまる

③．どちらともいえない　④．どちらかというとあてはまらない

⑤．まったくあてはまらない

≪知識・理解≫

（１）ＬＧＢＴＱという言葉の意味を知っている

１回目調査で④・⑤と回答した生徒が４７％。２回目調査で①・②の割合が４９％増の８０％となった。

（２）ジェンダー平等の意味を知っている

１回目調査で③・④・⑤と回答した生徒が４２％。２回目調査で①・②の割合が２８％増の８６％となった。

（３）日本と違う文化で育った外国人が，日本で生活するときの困難について知っている

２回目調査で①・②の割合が，１７％増の８０％。１７％が③・④・⑤と回答している。

（４）多様性の考え方について，理解できている

２回目調査で①・②の割合が８８％。③も合わせると９９％となった。

≪意識・態度の変化≫　「考え方」「受け入れ方」の変化を測る項目

（５）自分と違う性の在り方や生き方を，尊敬できる

１回目調査で①・②の割合が８０％。③も合わせると９９％。２回目調査で①・②の割合が９３％となった。

（６）外国出身の人と協力することに抵抗はない

１回目調査で③・④・⑤と回答した割合が２９％。２回目調査では１０％まで減少。

（７）男女どちらも同じように活躍できる社会が望ましい

１回目調査で①・②の割合が９０％。③も合わせると９９％。

（８）無意識の差別や偏見が自分にはあるかもしれない【検証】

１回目　　２回目



様々な事業を通して「差別しているかも」「今の自分は偏見していない」等，個々の物差しで深く考えていることがわかる

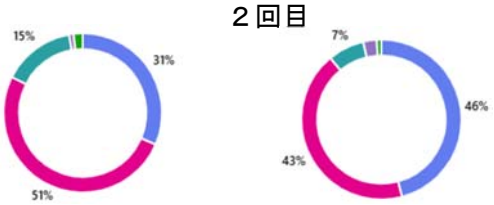
≪行動・実践意欲≫

（９）差別や偏見（いじめ）を見聞きしたとき，違和感を伝えている（伝えたい）【検証】

１回目調査で①・②の割合が５０％。２回目調査では６０％に増加。③も合わせて４０％が「伝えられない」という回答だが，自分に向き合う誠実さ，真剣さを垣間見ることができる。

（10）多様な人の意見を聞くように心がけている（心がけたい）【検証】

１回目　　２回目



これまでも心掛ける必要性は感じているが，より「今後は強く心がけたい」とみることができる。

（11）ＬＧＢＴＱ・ジェンダー平等・異文化についてもっと知りたい（これから勉強したい）

１回目調査で①・②の割合が７９％。２回目調査では８７％に増加。④・⑤が０％となった。

≪学習を終えて（感想：事後）≫

LGBTQ について詳しくしれた。海外の文化を体験してみたいと思った。（３年生）

性別は身体的性別と、心の性別で決まるのは知っていたが、好きな人でも決まると分かった。このクラスにも性的少数派の人もいるのかなあと思った。多様性は大切だと思ったし、尊重しようと思った。（３年生）

私は表では女みたいにしてるけど裏（心の中）では男みたいにしていたので私同じ感じの人が他にもいて安心しました。（２年生）

世界にはいろいろな人がいるからその人たちを批判するのではなく、認めてあげる世界であってほしいと思いました。（３年生）

性別は男女の二つだけではなく体や心などの区別もあることがわかりました。LGBTQ の意味や大切さを学ぶこともできました。ハリウリサさんが歌った「ヴィルマ」という曲では異文化の人たちとの交流での大切さ、親のあたたかさを共感する曲でした。（１年生）

② 学校評価アンケート（保護者・生徒）

※主に「地域の幸せ（社会参画）」，インターネットに関する項目

・私は，地域の活動やボランティア活動（クリーン活動）に積極的に参加しています。
≪生徒回答≫

そう思う　４４％　　どちらかと言えばそう思う　４０％
どちらかと言えばそう思わない　１１％　　そう思わない　６％

・お子さんは，地域のボランティア活動に積極的に参加しています。≪保護者回答≫

そう思う　２０％　　どちらかと言えばそう思う　３６％
どちらかと言えばそう思わない　２８％　　そう思わない　１６％

【検証・評価】
・地域社会の一員として歩もうとする生徒の変容を、保護者や教職員が的確に把握・評価できていないことが課題。今後は、生徒の日常的な活動を可視化し、大人の認識をアップデートする取り組みが求められる。

・私は，情報モラルを守り，インターネットやSNS等を安全で適切に使っている。

そう思う　７７％　　どちらかと言えばそう思う　２２％
どちらかと言えばそう思わない　１％　　そう思わない　０％

・お子さんは，情報モラルを守り，インターネットやSNS等を安全で適切に使っている。

そう思う　３４％　　どちらかと言えばそう思う　５６％
どちらかと言えばそう思わない　８％　　そう思わない　２％

【検証・評価】
・「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の割合が高い。これまでの情報モラル教育の成果と捉えている。

③ Q-Uアンケート（年２回）・客観データによる生徒の変容（成長）

※　主に「(自己受容・自己理解)」関すること

調査項目　以下に示す項目
調査対象　１～３年　（年２回）
①とても思う　②思う　③どちらでもない　④思わない　⑤とても思わない

・自分もクラスの活動に貢献していると思う

≪５月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	51.2	36.6	9.8	2.4	0.0
２年	38.9	38.9	22.2	0.0	0.0
３年	34.2	36.8	23.7	5.3	0.0

≪１１月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	41.5	29.3	17.1	7.3	4.9
２年	37.1	40.0	20.0	2.9	0.0
３年	42.1	28.9	21.1	2.6	5.3

・自分を頼りにしてくれる友人がいる

≪５月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	51.2	34.1	4.9	4.9	4.9
２年	48.6	34.3	11.4	2.9	2.9
３年	57.9	26.3	7.9	2.6	5.3

≪１１月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	58.5	24.4	12.2	2.4	2.4
２年	50.0	41.7	5.6	2.8	0.0
３年	52.6	23.7	18.4	5.3	0.0

・クラスの中で存在感があると思う

≪５月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	36.6	34.1	17.1	7.3	4.9
２年	33.3	30.6	22.2	8.3	5.6
３年	26.3	26.3	36.8	7.9	2.6

≪１１月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	41.5	29.3	17.1	7.3	4.9
２年	36.1	33.3	16.7	13.9	0.0
３年	36.8	28.9	21.1	10.5	2.6

・学校内に本音や悩みを話せる友人がいる

≪５月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	48.8	29.3	7.3	4.9	9.8
２年	50.0	25.0	19.4	2.8	2.8
３年	55.3	15.8	23.7	2.6	2.6

≪１１月≫

	①	②	③	④	⑤
１年	68.3	17.1	4.9	4.9	4.9
２年	50.0	25.0	13.9	8.3	2.8
３年	63.2	15.8	13.2	5.3	2.6

①とても思う　②思う　③思わない　④とても思わない

・ケンカをした時自分に悪い点がなかったか考えている

≪５月≫

	①	②	③	④
１年	80.5	17.1	2.4	0.0
２年	72.2	22.2	5.6	0.0
３年	73.7	13.2	13.2	0.0

⇒

≪１１月≫

	①	②	③	④
１年	85.4	14.6	0.0	0.0
２年	75.0	25.0	0.0	0.0
３年	78.9	15.8	0.0	5.3

・班活動で友人が失敗した時は、許している

≪５月≫　　≪１１月≫

	①	②	③	④		①	②	③	④
１年	85.4	14.6	0.0	0.0	⇒	90.2	9.8	0.0	0.0
２年	86.1	13.9	0.0	0.0	⇒	91.7	8.3	0.0	0.0
３年	78.9	18.4	0.0	2.6	⇒	89.5	7.9	2.6	0.0

・みんなのためになることを自分で見つけ実行している

≪５月≫　　≪１１月≫

	①	②	③	④		①	②	③	④
１年	43.9	43.9	9.8	2.4	⇒	58.5	29.3	12.2	0.0
２年	48.6	37.1	14.3	0.0	⇒	47.2	41.7	8.3	2.8
３年	47.4	36.8	7.9	7.9	⇒	52.6	34.2	13.2	0.0

【検証・評価】

・総じて，全国平均より高い数値である。

・年間を通じて「自己肯定」の意識は上昇傾向にある。特筆すべきは、「失敗した友人を許せる力」の向上。通常、自己肯定感が不足していると、自尊心を守るために「他人のせいにする（外罰的反応）」という習性が働く。しかし、意識の矢印を自分に向け、自他の失敗をありのままに受け入れられるようになったことは、内面的な自信が深まり、自分自身を正しく肯定できている明確な裏付けと言える。

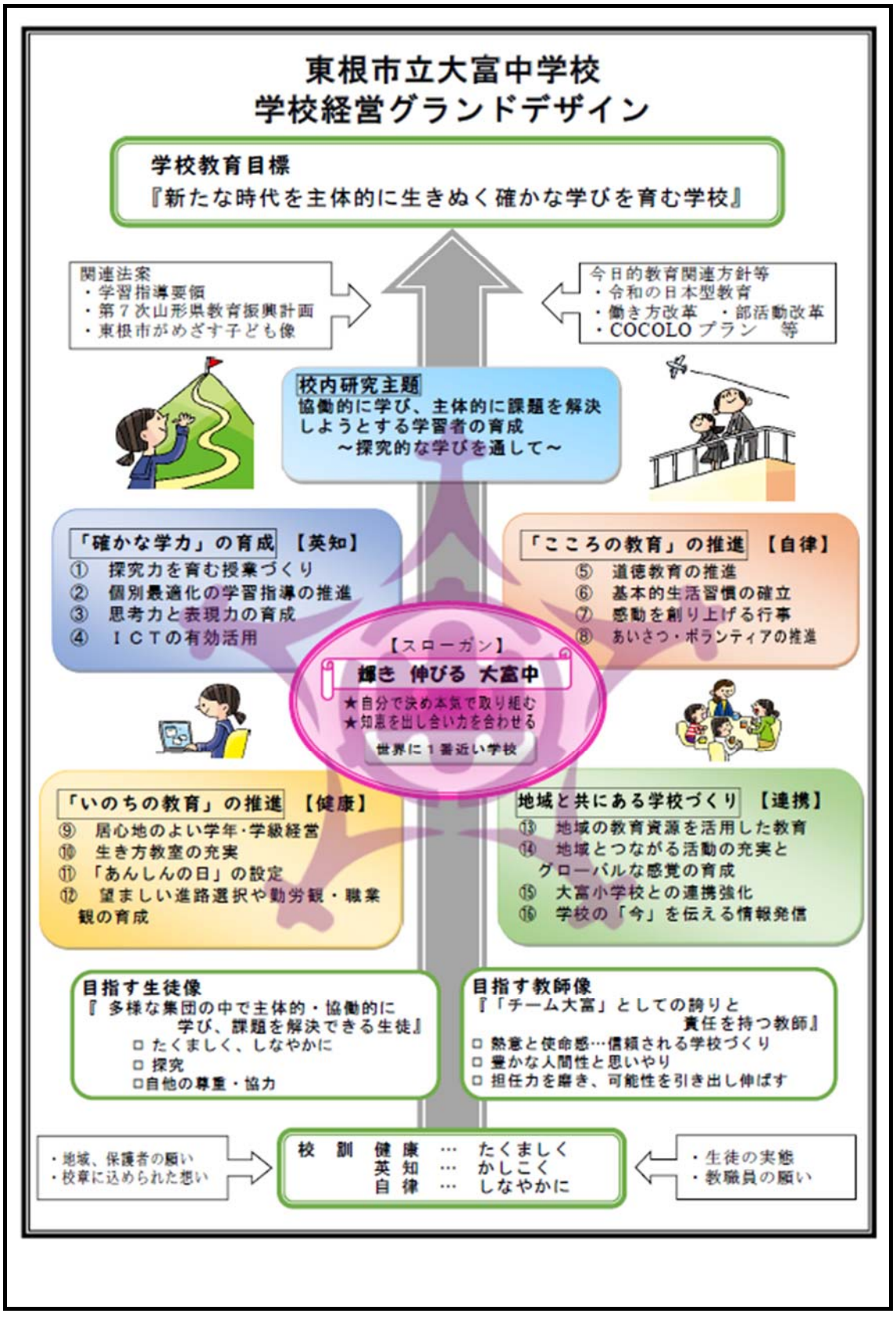
・ネガティブな捉えの生徒が確実にいることをつかみ，個別の支援とともに，戦略的に学級経営に取り組む必要がある。

【改善・普及】

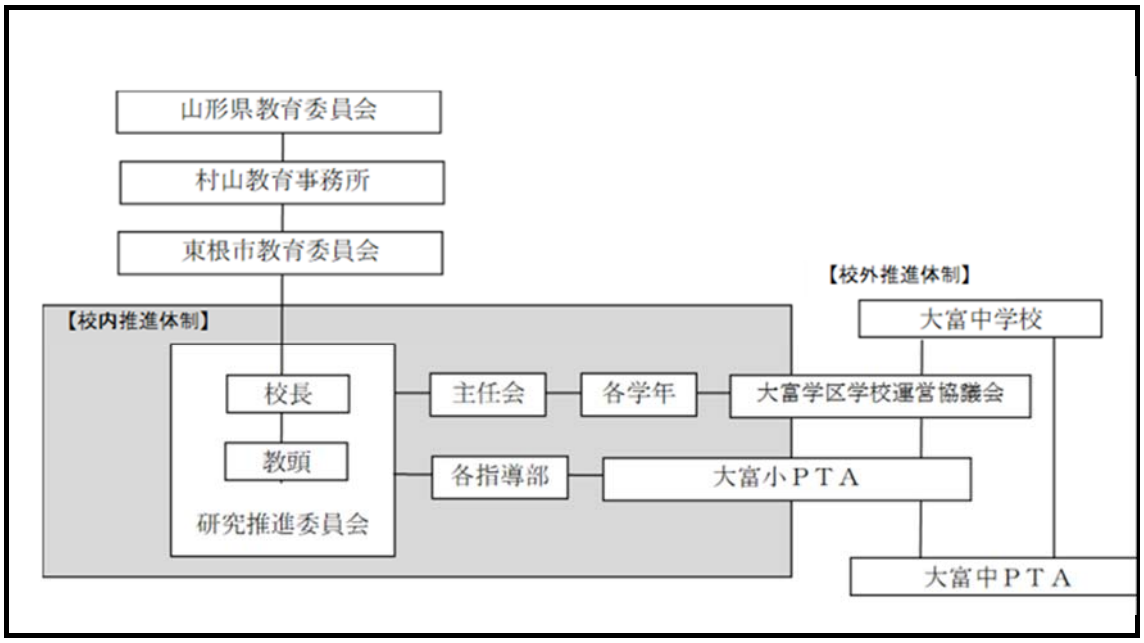
① 偏見や差別の不当性は広く認識されていますが、その根絶は容易でない。児童生徒の当事者意識を醸成する上で、実体験に基づく講話は極めて有効である。本年度実施した講話の事後検証では、知識の習得のみならず、自らの内面にある無意識の偏見と向き合う「内省的プロセス」の深化という大きな成果が得られたと分析。この知見を基に、来年度以降は「スマイルサミット」において、全校展開を見据えた具体的な企画を積極的に提言していく。

② 本年度より、中学校区内一小学校としての特色を活かし、学校運営協議会の合同開催を導入した。系統性のある「地区の育てたい子ども像」を構築するにあたり、本事業（人権教育）は極めて効果的な役割を果たした。特に人権教育の効果を期待する視点「他者理解」や「自己省察」は、委員が主体的に学校運営に参画するための端緒（切り口）となり得るものであり、今後の協議会活性化に向けた強力な推進力となることが期待される。

５．人権教育にかかる年間指導計画



６．推進体制（都道府県・指定都市教育委員会等を含む）



７．関連資料



大富中学校

4　道徳教育全体計画

学校教育目標
『新たな時代を主体的に生きぬく確かな学びを育む学校』
目指す生徒像
『多様な集団の中で主体的・協働的に学び、課題を解決できる生徒』
・受け継いだ「いのち」の役割を理解し、たくましく、しなやかに生きる生徒（「いのち」をつなぐ人）
・自ら課題を持ち、探究的に問題解決を図ろうとする生徒（学びを生かす人）
・自他を尊重し、自己の使命を自覚し、進んで協力する生徒（地域をつくる人）

日本国憲法
教育基本法
学校教育法
学習指導要領
6教師後期計画
東原市が目指す
子ども像

道徳教育重点目標
・それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、他者と協力し合おうとする心を養う。
・自律し、ルールを守り、よりよい集団や社会の実現に努めようとする誠実な心を養う。
・郷土を愛し、その発展に努め、他国を尊重しようとする心を養う。

重点項目
A「自主・自律、自由と責任」、「節度・節制」、「向上心、個性の伸長」、「希望と勇気、克己と強い意志」
B「相互理解、寛容」
C「社会参画、公共の精神」、「勤労」、「よりよい学校生活、集団生活の充実」

各学年の重点目標と重点項目

第１学年
・決まりを大切に、主体的に考え、判断し、誠実に行動する生徒
・集団の一員としての自覚を持ち、それぞれの個性を認め、協力し合う生徒
重点項目
A「自主・自律、自由と責任」
B「相互理解・寛容」
C「よりよい学校生活、集団生活の充実」

第２学年
・集団の一員として、お互いを認め、協力し高め合う生徒
・困難に怯まず、自分の仕事に主体的に取り組む生徒
重点項目
A「向上心、個々の伸長」
B「相互理解・寛容」
C「勤労」

第３学年
・最高学年としての自覚を持ち、責任ある行動がとれる生徒
・広い視野を持ち、目標に向かって最後まで努力する生徒
重点項目
A「希望と勇気、克己と強い意志」
B「相互理解、寛容」
C「社会参画、公共の精神」

各教科
国語：言語感覚を豊かにすることによって、道徳的心情・判断力を養う。
社会：公民的資質の基礎を養うことで、社会とかかわる力を高める。
数学：数理的に考察する活動を通して、判断力を育成する。
理科：自然とのかかわりを通して、生命尊重や環境保全の態度を養う。
音楽：表現や鑑賞を通して豊かな情操や生きることの喜びを育てる。
美術：作品の制作や鑑賞を通して、個性尊重・美に感動する心を養う。
保・体：集団での運動学習を通して心身の健康と集団生活に必要な態度を養う。
技・家：生活に必要な技能を習得する活動を通して、勤労の意義を理解させる。
英語：外国の言語や文化に対する理解を深めることで、国際理解の基礎を養う。

特別の教科　道徳の指導方針
・各教科や総合的な学習の時間、特別活動等の指導と密接な連携を図る。
・学級における信頼関係に基づく温かい人間関係を築き上げ、心の交流を深める。
・問題解決的な学習を通して、多面的・多角的に考察し、主体的に判断して、よりよく生きていくための資質・能力を養う。
・全教師が協力し合う指導体制を充実する。

総合的な学習の時間
・探究活動を通して、自己の生き方を考える態度を養う。
・自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく、問題を解決する資質や能力を育てる。

特別活動
学級活動：学級を基盤とし、集団の一員としての望ましい資質、態度を養う。
生徒会活動：よりよい学校生活を送るために、進んで活動しようとする態度を育てる。
学校行事：諸行事での体験を通して、自主性・協調性、及び豊かな心情を育成する。

家庭との連携
・学校・学年・学級通信、PTA通信などで保護者との連携を図る。また、保護者会等を通して、学校での道徳教育についての理解と協力を得る。
学級・学校環境
・道徳教育を切り口とした環境ISO（「100M花壇」つくり等）活動を通して、環境に役立とうとする人材の育成に努める。
・読書を通じて心を養う道徳教育に資する。
地域社会との連携
・各種機関等との連携を図る。クリーン作戦、地域の祭りやボランティアへの参加を通し、世の中のために役立とうとする人材の育成に努める。

生徒指導
・基本的な生活習慣を身につける。
・集団の一員としての自覚を育てる。
・差別のない人権尊重の精神を養う。
・実践を通し社会奉仕の精神を養う。